

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

30 堀川恵子「ヒロシマ 七〇年後」

■目標 新しいタイプの複数資料が絡む設問に答える。

■追跡

- ① その人が存命であると知ったのは二〇一三年春、最後に会った時から一五年の歳月が経っていた。
- ② その人の住まいは当時から二度ほどかわり、今は広島市内のはずれにある老人保健施設で過ごしているという。一九九八年に倒れて人前から姿を消して以降、目は見えなくなり、歩くこともできなくなったと事前に聞いていた。当時の記憶から計算すると、九三歳になっている。

エピソードから始まるエッセイ・スタイル。筆者は、「その人」と一九九八年、七八歳のときに会っている。そして、「現在」は、二〇一三年春、「その人」は九三歳。目が見えず、歩けない。場所は広島市内のはずれにある老人保健施設。時・場所・人の情報を確かめよ。

- ③ 広島駅からバスで四〇分余り、小さな峠をひとつ越えたところにその施設はあった。
- ④ 案内されたのは四人部屋。みな、寝かされたまま身動き一つしない。その人は、窓際のベッドにエビのように丸まって横たわっていた。布団からのぞく背中が、前よりいっそう小さくなったように見える。声をかけたが反応はない。もう会話はできないのだろうかど覚悟した。しかし、近づいてよく見ると、胸に小さなラジオを抱いている。右耳には、ラジオのイヤホン。時が止まったような部屋で、自由には動かせぬ身体で、その人はジッと日々のニュースを聞いていた。
- ⑤ その人の名前は、佐伯敏子さん。
- ⑥ 覚えてはおられないだろうと思いつながら、まず声をかけ名を名乗った。佐伯さんはイヤホンを外し「ああ。」と小さく答えたまま動かない。誰か分からず戸惑っているようだ。それでも、出会った頃のことを語りかけているうち、小さな手がソツと伸びてきた。私の右手をギュウツと掴んだその手は温かく、驚くほど力強かった。浅黒い皺だらけの顔に、懐かしい笑顔がいつばいに浮かんだ。
- ⑦ 一度は途切れてしまった佐伯さんとの時間は、まだ残されていた。

佐伯さんと筆者の関係はまだ知らされない。しかし、佐伯さんの温かく力強い手や懐かしい笑顔という反応は、お互いのかつての関係を示唆する。そして、それが今、復活する。

- 1/12 -

- ⑧ 私たちが出会ったのは、広島市の平和記念公園の片隅にある、小さな塚の前だった。
- ⑨ 直径一六メートル、高さ三・五メートルの小山のような塚は、表面を芝生に覆われていて、まるで緑のお椀を地面に伏せたような格好をしている。古くから塚のことを知る人は、ここを「土饅頭」と呼ぶ。

⑩ その周りにうっそうと生い茂る木々の緑は、土饅頭を周囲の人々の視線から遮断しているようだ。子どもたちの平和学習や広島市の観光ルートからも少し外れていて、日中、訪れる人はほとんどいない。

- ⑪ 土饅頭の正式な名称は、「原爆供養塔」という。

場所と時間が動いている。ここは、かつて、一九九八年、七八歳の佐伯さんと筆者が出会った場所だ。回想モードになっていることに注意。エッセイ・スタイルの文章を読むときには、小説読解のスキルを応用しよう。なんとなく読むのではなく、時場所人の特徴や動きを意識して読むこと。試験だからね。

「原爆供養塔」、そして、広島市の平和記念公園に行ったことはあるだろうか。行ったことがある人は、その情景を思い浮かべながら読もう。

- ⑫ ——原爆供養塔に行けば、佐伯敏子さんに会える。

- ⑬ こんな言葉が広島を訪れる人々の間に口伝てに広まるようになったのは、一九七〇年代も終わる頃からだという。本当に小柄な、小さな小さなおばあさんは毎日そこにいた。
- ⑭ 土饅頭の周りを行ったり来たりしてゴミを拾い、竹ぼうきで掃き、水を汲み、供えられた花を一輪一輪、切り戻している。半円の緑の膨らみに、ちっちゃなテントウムシがとまるようにして、芝生に這いつくばって無心で草取りをしていることもある。そういう時は話しかけても見向きもしない。頭には、べつのが浮かんでいるからだ。土饅頭のそばのベンチに座り、静かに本を読んでいることもあるし、道行く人をつかまえて、問われぬ土饅頭の説明をしていることもある。修学旅行の子どもたちを前に語り掛けている時の真剣なまなざしと笑顔は、いつになく華やいで見えた。原爆供養塔のそばに姿が見えたらない時は、近くの元安川に下りている。岸辺で半腰になって身を乗り出し、そこに流れている戦時中の学生ボタンを黙々と拾い集めている。おばあさんは、いつも必ず黒い服を着ていた。そう、喪服だった。

ここまで読み、佐伯敏子さんの名前に聞き覚えがある人もいるのではないか。⑫⑭は、彼女を紹介するパート。語り部としても活動した。

ウイキペディアにも記載がある。ぜひ、検索し、彼女の生涯を読んでみてほしい。清掃活動は、一九六〇年より以前から行われていた。彼女は語り部としても活動した。

- 佐伯敏子(さいきとしこ、1919年(大正8年)12月24日—2017年(平成29年)10月3日)は、日本の反核運動家。

- 2/12 -

広島市への原子爆弾投下による被爆者の1人。広島平和記念公園内で被爆者たちの遺骨を供養する原爆供養塔の清掃活動のボランティアを長年にわたって続けていたことから「原爆供養塔の守り人」「ヒロシマの祖母さん（おおかあさん）」とも呼ばれる。反核運動・平和運動のための被爆証言活動にも挺身しており、その証言内容は平和教育の題材として広く活用されている。

⑮ 私が佐伯さんと出会ったのは、一九九三年のことだ。原爆供養塔を目指して一目散に走っていると、佐伯さんはいつも竹ぼうきを片手に困ったような顔をして立っていた。「あんな、元気なのはええけどね、ここはソオツと歩かにはあけんよ。まだ大勢の人が眠っておられる場所なんじゃから。」

⑯ 平和記念公園の足元は一面、分厚いコンクリートで塗り固められている。その冷たい塊の下にはかつて、広島有数の繁華街があった。そのことを、佐伯さんはよく語ってくれた。

⑰ 現在の公園中央にある原爆死没者慰霊碑のまわりには、映画館やハイカラなカフェ、旅館が立ち並んでいた。東西を走る商店街にはビリヤード場、うどん屋、靴屋、薬局、楽器店に印刷所が軒を連ねた。東の元安川の岸にある大きな舟着き場には、上流の村々や下流の島々から野菜や木材がどっさり届いた。川伝いに方々から物資が集まる場所だから公設市場もあって、にぎやかな掛け声が辺りにこだました。そこは公園などではなく、人々の暮らしの息吹に満ちていた。

これは、現在の平和公園（テレビでもよく映る）しか知らない者にとつては、想像できない姿ではないだろうか。大阪のミナミのような、道頓堀のようなにぎわい。

堀川恵子は、一九六九年広島生まれ。ノンフィクション作家。一九九三年当時、二四歳。報道記者・ディレクターとして広島テレビ放送に入社ばかりのころだ。

⑱ あの日、瞬時に命を奪われた人たちが、足元にはまだ大勢眠っている。佐伯さんはいつも「ごめんさい、ごめんさい。」とつぶやくように繰り返しながら、平和という名の冠を頂く公園の中をそつと歩いた。

⑲ 原爆供養塔の前で、たくさんの人が佐伯敏子さんと出会った。人目につかぬよう、いつも静かに行動する本来の佐伯さんのありようとは対照的に、その記憶を語り継ぐことする人たちの動きはどんどん広まっていった。佐伯さんの話を記録したミニコミ誌や証言集、そして文集の数は、おそらく全国のあちこちに数万、いや十数万という単位を楽に超えてしまうだろう。晩年の佐伯さんを「広島の大母さん」と呼ぶ人もあった。

ここも、佐伯さんの紹介。「そつと歩け」という自分の聞いた言葉と、佐伯さんの態度を重ね、足下に眠る、瞬時に命を奪われた人たちのイメージと彼らへの思いを届けてよこす。

⑳ それからずいぶん時が流れた。久しぶりに再会した日、佐伯さんはベッドの上で語り続けた。まるで心の内に溜めていた思いの丈を吐き出すように、原爆供養塔のこと、正確にはその「地下室」のことを何度も繰り返し返した。

原爆供養塔の「地下室」とは何か。

21 緑の小山の下に、その場所はある。原爆供養塔の北側にある数段の階段。そこを降りると、人ひとりやつと通れるほどのステンレス製の扉が頑丈に施錠されている。

22 この扉は、あの日、生と死を分けた人々の間をへだてる「境界線」だ。

境界線とはどういうことなのか？

23 扉の向こうにあるのは、薄暗い一〇畳ほどの小さな空間。正面には阿弥陀仏が置かれ、境界線から内側へと足を踏み入れてくる人たちを静かに見つめている。壁の三方にはコの字型の六段の棚。その床から天井まで、大小の箱が壁一面にぎっしりと積み上げられている。納められているのはすべて、人の骨だ。

24 この地下室に遺骨として眠る人の数、およそ七万人――。

この衝撃的な情景を思い浮かべてみよう。あの日を境に命を失った、七〇〇〇〇人の骨。佐伯さんは、その境界線から生の側へ押し出された一人だ。

（参考 ウィキより）一九四五年（昭和二十年）八月六日、佐伯は長男に逢うために姉の家を訪ねていた。同日、広島市に原子爆弾が投下。姉の家は爆心地から一〇キロメートル離れていたために佐伯は直撃を避けられたが、母と夫の家はいずれも爆心地近くであったため、被害に遭った家族や親族たちを捜して、まだ火の海となっている市内の爆心地を駆け回った。この際、まだ生存している重傷者たちが無傷の佐伯に助けを求めたが、家族を捜す佐伯は彼らを見捨てざるを得なく、大きな後悔を残すこととなった。また、市内を歩くには道を埋め尽くす多くの死没者たちの遺体を踏みつけることなく、このときの足の感触はその後一〇年以上にわたって佐伯の心を苦しめることとなった。この四〇年後にも当時のことを「足が熱く、人の上を踏んで歩いた。人間としてやってはいけないことをした」と振り返っている。

25 大きな箱には大量にひとまとめにされた遺骨の山が、小さな骨箱にはひとりひとり、小分けにされた遺骨が納められている。骨箱にはすべて、名前が書かれている。名前だけでなく、亡くなった場所や本籍地の町名や番地、通っていた学校名、中には亡くなる時に身につけていた写真や遺品が添えられているものもある。

私たちはここで、原爆供養塔の「地下室」が、七〇〇〇〇人といった「数」ではなく、

また、「原爆の犠牲者」といった抽象的な存在ではなく、個々の具体的な生を持っていた人々の印が納められている場所であることを知る。

26 佐伯さんはかつて、この半地下の部屋に毎日のように籠もった。

27 骨箱は現在、陶器製の壺に新調されているが、当時はまだ、被災後に用意された朽ちかけた木の箱だった。コトリとも物音のせぬ冷たい部屋で、佐伯さんは毎日、棚から骨箱をひとつだけ選び出し、蓋を開けた。そして、骨と一緒に入れられた「古紙」を取り出しては、そこに書きつけられた死者の名前や住所を自分のノートへと書き取った。

28 「どうか、お導き下さい……。」

29 骨箱を撫でながら、ぶつぶつ語り掛けるその光景は、知らぬ人が見れば凄まじいものに映るだろう。

彼女は何をしようとしているのだろうか？

30 死者たちの眠る空間から地上に戻ると、佐伯さんはわずかな手がかりをもとに、あちこちを訪ね歩いた。電話をかけ、手紙を書き、訪問先の玄関にメモを置き、拒絶されてもまた訪ねる。そんなことを繰り返しながら、遺骨を遺族のもとへと届けてきた。

「何の得があつてそんなことを。」

31 近所の人たちからは笑われた。気味が悪いと遠ざける人もいた。後ろ指をさされたことは一度や二度ではない。時に行政も、勝手なことをしてくれるなど、その小さな身体の前には立ちだかつた。だが、佐伯さんは原爆供養塔へ通うこと、そして遺骨を遺族に戻すための旅を決してやめようとはしなかつた。

「遺骨を遺族に戻さなければならぬ」。彼女は、なぜそのような強い思いを抱き続けたのか。

32 遺骨となった死者たちは、あの地下室に無縁仏として置かれたまま。その遺骨の上に今、七〇年という歳月が流れようとしている。想いは募れども、自分ではもう一步も歩くことすらできぬ無念さが、歳を重ねた佐伯さんの心を激しく揺さぶっていた。

二〇一三年春、〈現在〉の場面に戻っている。原爆投下から六八年が経過している。佐伯さんは、動けるなら、遺骨を遺族に戻す営みを続けたい。その気持ちを筆者に語る。

33 七万人もの遺骨が納められた原爆供養塔は、いわば広島の墓標だ。

34 一九八六年以降、原爆供養塔の地下室に続く扉は固く閉じられている。清掃など広島市の業務以外で開けられることはない。市民がその中の様子を知ることができたのは、報道から公開の要請があつた一九九四年と二〇〇〇年の二度だけ。この空間を完全に遮断し

た理由について広島市は、「死者が眠る神聖な場所だから。」と説明する。

広島市の考えは、佐伯とは異なる。その違いはどこから来るのだろうか。

35 かつて原爆供養塔のそばには、遠くから見ても一目でこの場所だと分かる巨大な木碑が建っていた。「原爆納骨安置所」と書かれたその木碑は、ある日、市民に知らされることなく撤去された。そして供養塔の地下室へと入る入り口に書かれた「安置所」という大きな文字も、知らぬ間に白いペンキで塗りつぶされた。

36 死者の存在を示す印そして言葉は、年々、目立たぬよう細工されてきた。かろうじて原爆供養塔の南側に新しい案内板が置かれているのは、被爆者の遺族が、せめて「名札」くらい立てて欲しいと訴え続け、二〇〇五年になってようやく実現したものだ。

ここで一貫して行われたことは、「死者の存在を見えないものにしよう」とすることだったとわかる。「死者の存在を見えるものにしてしよう」とし続けた佐伯さんと、「見えないものしよう」とし続ける勢力。

読解問題1ここに眠るのは「神」でも「仏」でもなく、「人間」である。さらに言えば、無差別に殺された人たちだ。「神聖」というもつともらしい響きの中に、遺骨となった死者たちにまつわる苦しみに満ちた記憶は遠ざけられてしまった。

読解問題は、最後まで読んでから考えよう。「苦しみに満ちた記憶」の消去。「苦しみに満ちた記憶」の掘り起こし。この対立が、この文章の軸にあることに気づく。

37 平和大通り、平和大橋、平和マラソン、さらには病院やホテルの名前にまで、この町には「平和」の二文字が溢れている。しかし今、平和都市を自任するこの町の、過去の傷跡にふれようと意気込んで訪れる人は、まず失望するだろう。どんなに目をこらしても、ここに他の地方都市と異なる風景を見つけないのは難しい。当時の痕跡をかるうじて残していた被爆建物は次々に解体され、今や見る影もない。ビルの谷間に埋もれた原爆ドームは平和都市のシンボルとしての大役を果たしてはいるが、甚大な犠牲のほんの一点に過ぎない。原爆資料館では、訪問者に当時の凄惨な雰囲気伝えてきた被爆者のケロイド人形が、二〇一六年には撤去されることが決まった（二〇一七年に撤去）。

ここにあるのも、過去の悲惨さを消去することへの告発である。

38 広島の戦後から、死者たちの姿はどんどん消えていく。平和とはまるで、白いハトを青空に飛ばすことであり、折り鶴を飾ることであり、緑豊かな公園や子どもらの美しい歌声にとって代わってしまったようだ。読解問題2七〇年前、無念のまま町のあちこちで燃

やし尽くされた”死者たち”の声は、どんなに耳を澄ましても聞こえてこない。

読解問題1 「ここに眠るのは「神」でも「仏」でもなく、「人間」である。さらに言えば、無差別に殺された人たちだ」とあるが、ここに筆者のどのような考えが表現されているか、説明しなさい。

死者の存在を隠そうとする動きを取り上げた後に続く部分である。特に「死者が眠る神聖な場所だから」といういいわけに対して、「神」や「仏」ではない、という言葉で対応している。当局の「死者が眠る神聖な場所」という表現には、「原爆の死者は、もはや神や仏のように心安らかに、納得して眠っている」という考えが現れている。

一方、筆者は、佐伯さんの思いに共感するように、「死者が眠る神聖な場所」や「平和」といった、美しく抽象的な言葉で飾り、死者の姿、その「苦しみに満ちた記憶」を見えなくしてしまうやり方を批判している。死者は安らかに眠ってなどいない。個別の苦しみの記憶を抱えたままそこにいるし、その苦しみを私たちも知らなければならぬ。直接的に書かれてはいないが、そのあたりまでは読み取ってよいと思われる。

最後の「無差別に殺された人たちだ」を敷衍してみよう。言葉を足す、ほぐす、ということだ。誰に殺された？ 何のために殺された？

答案の形を「神仏なんかじゃなく、苦しみ抜いた人間がいるんだよっ！」とスケッチしておく。あとは、自在に、あなたの言葉を使って書いてみよう。みんなの答案が百花繚乱のごとくあれ。

【解答例】「死者が眠る神聖な場所」には、死者は神や仏のように安らかに眠っていることしようという考えがにじむが、筆者は、そのような定型句に憤りを感じ、それぞれの人間としての固有の日常と命を、突然、残酷な兵器によって奪われた苦しみを抱えたまま今もそこにいる、生々しい人間の姿を見ようとしている。

読解問題2 「七〇年前、無念のまま町のあちこちで燃やし尽くされた”死者たち”の声は、どんなに耳を澄ましても聞こえてこない」とあるが、次の文章を参考にして、過去を記憶するとはどのようなことか、文章にまとめなさい。

○「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」（「原爆死没者慰霊碑」碑文）

○「碑文はすべての人びとが 原爆犠牲者の冥福を祈り 戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である 過去の悲しみに耐え 憎しみを乗り越えて 全人類の共存と繁栄を願い 真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻まれている」（「慰霊碑」説明板）

○「過去の真のイメージはさ、つと掠め過ぎてゆく。……一度逃したらもう二度と取り戻すことのできない過去のイメージとは、自分こそそれを捉えるべき者であることを認識しなかつたあらゆる現在とともに、そのつど消え去ろうとしているイメージなのだ。」（ペンヤ

ミン「歴史の概念について」)

これは新しいタイプの設問の形だ。とはいえ、これまでも、国公立の後期試験や小論文の出題の中では、資料をいくつか示して内容をまとめる問いは存在した。「複数資料」に基づく記述、がいよいよ、一般の国語問題にも定着するときに来たようだ。

「あなたの考えを述べよ」という問いとは少し違う。

☆問いである「過去を記憶するとは？」に対して、メイン・テキストの立場から応答する。かんたんにいうと、メイン・テキストの筆者（この本文の場合は、佐伯さんも含む）が「過去の記憶」についてどう考えているか、を答えることになる。それだけなら、単一のテキストだけで答えられそうであるが、ここでの課題は、サブ・テキストを効果的に使って、「過去を記憶するとは？」という、いわば普遍的な問いへの応答として、筆者たちの考えを押し広げよ、ということである。

手順としては、まず、メイン・テキストの立場を再確認する。次に、メイン・テキストの視点から、各資料（サブ・テキスト）をクリティカルに分析する。メイン・テキストでは不足していた内容や言葉を活用して、答えを組み立てる。

まず、「七〇年前、無念のまま町のあちこちで燃やし尽くされた”死者たち”の声は、どんなに耳を澄ましても聞こえてこない」を確認しよう。直前には、「広島島の戦後から、死者たちの姿はどんどん消えていく。平和とはまるで、白いハトを青空に飛ばすことであり、折り鶴を飾ることであり、緑豊かな公園や子どもらの美しい歌声にとって代わってしまったようだ」とある。

この情景は、「過去を記憶していること」になるのか？ 否。それが筆者の視点である。では、「過去を記憶していること」とは？ 言葉の上でひっくり返せば、「七〇年前、無念のまま町のあちこちで燃やし尽くされた死者たちの声が、今も聞こえること」である。死者の声を今も聞く、とはどういうことか？ こんな風に問いを組み替えられる。

☆分析するためには、自分で問いを立てる力が必要。

サブ・テキスト1の分析。

○「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」（「原爆死没者慰霊碑」碑文）

これは、自身も被爆者である雑賀忠義広島大学教授（当時）が撰文・揮毫したものとして有名。しかし、このことを巡っては、「過ちを繰返さない」という、その主語がだれなのかという論争が続いた。日本人？ 米国人？ 人類全体？ この言葉は死者に語られているが、では、これに対して、無念の死を遂げた死者はどんな声を上げるだろうか？ そう問うてみよう。



「その過ちはどのようにして起きたのだ？ 私はなぜこのように苦しまなければならなかったのだ？ 繰り返さないという、その誓いは誰がいつているのだ？ そして、現実はその言葉通りの行動をしているのか？」

死者の場所から〈声〉を再生してみればわかるように、これらの問いは、すべて現在を生きている私たちが抱くべき問いだ。今も世界は核に覆われている。どんな理屈を立てようが、核が使われる可能性は現実のものとして、ここにある。しかも、米国も、日本も、核兵器禁止条約に参加していない。これは、歴史を記憶し死者の声を今も聞いているといえるか？

サブ・テキスト2の分析。

○「碑文はすべての人びとが 原爆犠牲者の冥福を祈り 戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である 過去の悲しみに耐え 憎しみを乗り越えて 全人類の共存と繁栄を願い 真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻まれている」(「慰霊碑」説明板)

これは先の「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」の説明として掲げられているもの。主語は、「すべての人びと」ということになっている。これは筆者の視点からはどう映るか？ 「過去の悲しみに耐え 憎しみを乗り越えて」「全人類が共存し繁栄する」という言葉は、それ自体美しいけれども、死者の視点から見れば、自分たちの死が美しく隠蔽され(遺骨の安置所は立入禁止となった)、地下の記憶はなかったことにされ、地上では、ほんとうには何が起きたかを知らない人々が、白い鳩が飛ぶ美しい公園で戯れている、という絵柄にしか見えないのではないか。「真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心」といった当たり障りのない語句が、死者の声を封じる。

サブ・テキスト3の分析。

○「過去の真のイメージはさつと掠め過ぎてゆく。……一度逃したらもう二度と取り戻すことのできない過去のイメージとは、自分こそそれを捉えるべき者であることを認識しなかったあらゆる現在とともに、そのつど消え去るうとしているイメージなのだ。」(ベンヤミン「歴史の概念について」)

ベンヤミンは、ドイツの名高い思想家・批評家。「ドイツ悲劇の根源」「暴力批判論」「複製技術時代の芸術」など、評論にもよく引用される。ユダヤ系の富豪の家に生れたが、マルクス主義に接近、一九二六年ソ連を訪れた。三三年ナチスに追われ、パリに亡命。アメリカに向う途上ス페인との国境で、ゲシュタポに引渡されることを恐れて自ら命を絶った。

これだけの断片を解釈するのはなかなか困難かもしれないが、挑もう。

「過去の真のイメージ」はどのようにしたら、捉えられるのか？ (＝死者の声を今も聞くにはどうすればいいか?) これが私たちの課題だった。ベンヤミンは、それが捉えがたいものであるといっている。

「過去の真のイメージ」は、どこかからさつとやってきて、さつと消えてしまう。「過

- 9/12 -

去の真のイメージ」をこちらから捕まえようとしても、蝶がいつのまにかどこかから現れるのを待つように、待っているしかない。そして、現れると、さつと消えようとする。

しかしよく見よう。ここには、一つの条件が隠れている。

「自分こそそれ(過去のイメージ)を捉えるべき者であると認識(自覚)するかどうか。私たちは、自分こそ今の現在を捉えるべき者だ、などと認識することなく、ぼつと生きていく。現在は刻々と過去になって消えていく。真ではない、修正された記憶は、いつでも私たちの中にある。私たちは過去を現在から都合で組み立て直して利用している。自分の行動の根拠やいいわけとして呼び出している(あいつがああ言ったから、こうしたのだ的な物語)。

しかし、「過去の真の記憶」は、あるとき、何かをきっかけとして、ふいに現れるだけだ。ある言葉を耳にしたとき、本当は彼はそうは言わなかった、という生々しい過去が再生する、とか。おれは米国の正義のために堂々と原爆投下の任務を果たしたんだ、という物語が、ふいに胸を焼くような苦痛とともに否定される、とか。

そのとき何が起きているのか。それは、流れていった(現在)がここによりみがえっているのである。そのとき、「自分しか、この過去の(現在)を捉えることはできないという自覚」が過去を確かにつかませる。この蝶をおれが捕らえる。確かに捕らえられる。この感覚は、**自分が当事者である**という感覚である。堀川恵子さんのいう「耳を澄ませる」という態度はこれに当たる。

個人の歴史だけではなく、社会的な歴史にも、この態度は適用されるだろう。「過去を記憶するとは?」「死者の声を聞くとは?」それは、自分が当事者であるという感覚を持つて、声がよみがえるための行動を継続し続けることだ。

佐伯敏子さんが行っていた「遺骨を遺族のもとへと届ける」「体験を語る」という行動は、流れていった過去を、自分が当事者であるという感覚を持つて、今ここに気づき直させる行為だった。また、彼女の話を、自分が当事者であるという感覚を持つて聴くことも、今ここに「死者の声を聞く」ことにはかならない。なぜ、このようなことが起きたのか、と考えること。責任のありかを、当事者として、追求すること。これらは、過去の過ちの過程をよみがえらせるだけではなく、現在陥っている過ちに気づくための行為でもある。それは、定型句(虚構の物語、言い訳の理屈)で過去を閉じ込めることとは、対照的なあり方である。

【解答例】

過去を記憶するとはどういうことかについて、原爆の死者の例を通して考える。それは、自分たちの平和な日常に浸るために、死者に「安らかに眠って下さい」とだけ呼びかけ、死者の声を封印することではない。「平和を祈念する」といった語句で美しく飾り、生々しい苦しみを消し去ることもない。死者の声を今も聴くことができることが、過去を記憶しているということである。

では、死者の声を聴くとはどういうことか。それは、自分が当事者であるという意識を

持つて、出来事の起きたそのときを、今ここによみがえらせることである。私たちは、自分の経験した過去も、直接は経験しなかった過去も、自分をその当事者として捉えることによって、修正された虚構の記憶としてではなく、今の問題として考えることができる。例えば、原爆の死者に何が起きたのかについて、体験者の声を聴いたり、証拠として残っているものを見たり、誰の責任で、どのような経緯がこの惨劇を招いたのか考察したりすることによって、私たちは死者の声を代弁する当事者として、過去を今ここに保持することができる。

この例でもわかるように、過去を自分たちのものとして保持することは、過去の過ちを現実的に繰り返し返さないための、現在の行動を決定する確かな根拠を生むことにつながる。

・各資料を使い、・問い↓答えのすじみちを立て、・具体的な例を利用してまとめる。

ほとんど小論文のスキルであるが、今後、このタイプの問いも増えるかもしれない。やっぱり、自分の考え、もなくては書けない。知識も必要。資料から論理を組み立てるってというのは、まあ、法科大学院とかに行ったら、いやほど訓練することだけだ。

■読解問題

1 「ここに眠るのは「神」でも「仏」でもなく、「人間」である。さらに言えば、無差別に殺された人たちだ」とあるが、ここに筆者のどのような考えが表現されているか、説明しなさい。

2 「七〇年前、無念のまま町のあちこちで燃やし尽くされた「死者たち」の声は、どんなに耳を澄ましても聞こえてこない」とあるが、次の文章を参考にして、過去を記憶するとはどのようなことか、文章にまとめなさい。

○「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」（「原爆死没者慰霊碑」碑文）

○「碑文はすべての人びとが 原爆犠牲者の冥福を祈り 戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉である 過去の悲しみに耐え 憎しみを乗り越えて 全人類の共存と繁栄を願い 真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心がここに刻まれている」（「慰霊碑」説明板）

○「過去の真のイメージは、さつと掠め過ぎてゆく。……一度逃したらもう二度と取り戻すことのできない過去のイメージとは、自分こそそれを捉えるべき者であることを認識しなかったあらゆる現在とともに、そのつど消え去ろうとしているイメージなのだ。」（ベンヤミン「歴史の概念について」）

■発展問題

●日本政府は、国際的な核廃絶の運動に対して消極的である。それは、なぜか。さまざまな資料を渉猟して論じなさい。

●重要語「歴史」＝歴史もよく評論のテーマになる。歴史は過去だが、過去を捉えることには

根本的な困難がある。人は勝手に過去のイメージを変えてしまうからだ。かといって、過去などない、すべては幻想だ、というのも現実感がない。過去は今を規定している。その過去とは、何を指すのか。自分の過去、社会の過去。また、地球の過去、宇宙の過去。歴史を論じる評論にぶち当たるたびに考えてみてほしい。